

名護市で増えた外来種・台湾ハブ



名護市で捕獲された台湾ハブ

台湾ハブとは

台湾ハブは、中国南部と台湾が原産のクサリヘビ科の毒ヘビです。近年、名護市為又・中山地区(以後同地区と記す)で定着したことがわかっています。原産地では、低地から山地、森林から集落内まで幅広い環境に生息し、人への咬症も生じています。名護市でも住宅の庭や畑、道路など人の生活圏で目撃されています。毒の強さはハブの約1.2倍あり、動きが速く攻撃的で危険性の高い毒ヘビです。咬傷者の治療にはハブ用の抗毒素が有効です。

名護市への移入・定着

台湾ハブは、ハブ酒やハブ粉などの原料として1970年代頃から輸入され、県内の複数の施設で飼育されていました。名護市でも、少なくとも2施設で台湾ハブが飼育されていました(現在は、全ての施設で外国産ヘビの輸入をやめています)。同種が野外で初めて確認されたのは1993年ですが、野外に逃げ出した経緯はわかりません。台湾ハブの分布域は、1999年には同地区を中心とした広範囲(直径約4 km)に及んでいることがわかりました。

為又・中山地区での高密度化

同地区での捕獲調査で、2002年に40個体、2003年には111個体の台湾ハブが捕獲されました。ワナあたりの捕獲率は、沖縄本島中南部におけるハブの平均値の3～4倍になり、この地域の台湾ハブの生息密度が極めて高いことがわかりました。

同地区の住民による台湾ハブの目撃も2003年に入って急激に増えています。名護市では、区民への説明会を開催し、注意を促す看板と捕獲用のワナを設置して対応しています。



台湾ハブが捕獲された地域
ピンクは、1999年に分布が確認された地域。
は、それ以外の捕獲地点。

拡散防止対策を検討

台湾ハブの分布域は、1999年の調査では国道58号線(以後国道と記す)の北側にほぼ限定されていましたが、2004年までに国道の南側でも3匹が捕獲されました。南下が進めば、将来、本島全域に分布が広がる恐れがあります。国道南側ではまだ低密度と考えられるので、拡散防止対策を緊急に検討することになりました。手始めに名護市と共同で、拡散防止用のフェンスと誘導トラップを国道の歩道脇に設置しました。

今のところ、台湾ハブと明らかに判定できる咬傷は1例もありませんが、さらなる注意が必要です。(ハブ研究室)

年	ワナの運用		捕獲	
	台数	月数	数	率
1999	42	4.3	25	0.16
2002	35	2.5	40	0.45
2003	35	11	111	0.33
2004	28	8	58	0.37

名護市における台湾ハブの捕獲数と捕獲率
捕獲率は、1ヶ月間にワナ1台で捕れるヘビの数。
沖縄本島におけるハブの捕獲率は、
平均捕獲率(中南部5市町村):0.11
最高捕獲率(大宜味村,国頭村):0.35